

NEWSLETTER #135

p.1 第35回 日本ポピュラー音楽学会年次大会 JASPM35 を終えて福永健一

p.2 特集 三井徹先生 追悼文会員各位(五十音順)

三井先生と私

小さな声の力

三井徹先生の思い出

そちこちに三井徹の影がある。

嗚呼、そういうことだったのか

二股膏葉の思い出

三井徹先生を偲んで

無題

耳を傾ける三井さん

私と三井徹先生

大山昌彦

小川博司

於吹純一

佐藤良明

東谷護

中河伸俊

葉口英子

エドガー・W・ポーブ

細川周平

三井徳明

Information

p.12 事務局より

JASPM35 大会を終えて

大会実行委員長 福永健一

JASPM 第35回大会(@四国学院大学)を無事に終えることができました。今大会は、2019年の大阪大学大会以来3大会ぶりの対面開催であり、2005年の弘前大学大会以来17大会ぶりの地方開催でもありました。参加者は果たして何名か、不安を抱えながら準備を進めていましたが、予想を上回る77名(うち非会員10名、学生会員16名)の参加がありました。遠路はるばる四国までお越しいただいた皆さま、厚くお礼申し上げます。

地方の小さな大学は、大学の設備や周辺の街並みも都市部と大きく異なっており、皆さまには多くのご不便をおかけしたことと思います。しかしながら、対面での交流とその賑わいは、やはりオンラインでは得難いものだとあらためて実感しました。

今大会が盛会に終わったことは、大会実行委員と学生スタッフの皆さんによる支えなくしてはあり得ません。また、増田会長作成の「JASPM35 うどんマップ」は、飲食店の少ない大学周辺での飲食案内に大いに役立ちました。大会の準備運営にご協力をいただいた皆さまにも、厚くお礼申し上げます。

次回以降の大会も盛会であることをお祈りしております。

三井先生と私

大山昌彦(東京工科大学)

大学院時代の指導教員である三井先生への追悼文を書くにあたり、私の研究生生活を思い返してみると、「先生が敷いたレールの上を走っているのだな」ということを今さらながら実感させられます。

三井先生の名前を知ったのは、先生の著書からでした。高校時代ブルースを聴き始め、地元の図書館で関連雑誌や書籍を探しているなかで見つけたのが『黒人ブルースの現在』(1977年 音楽之友社)でした。ブルースマンの紹介だけでなく、ブルースの音楽的特徴からその社会背景まで網羅したこの1冊は、高校生の私にとって衝撃的でした。

大学時代、授業どころかゼミにもまともに出席しない不真面目な学生生活を送るなか、卒業条件であった卒業論文のテーマ決めて苦しむ時期に、三井先生の本のことを思い出しました。卒論では『黒人ブルースの現在』を道標として、チャーリー・パットンのライフヒストリーを通じ、ブルースの誕生を考察しました。当初は渋々取り組み始めた卒論も、自分が好きな音楽を対象にしたこと、資料を探しまとめ論文へと仕上げる作業が思いのほか楽しかったことから、卒業が差し迫った4年生の12月大学院進学を決意しました。現在も続く音楽文化の存立基盤としての社会への関心は、この時に始まっています。

大学院への進学にあたり、金沢大学に赴き初めて三井先生にお会いすることになりました。ピンクのTシャツにロングヘアという『黒人ブルースの現在』の著者近影から大学教員らしからぬヒップな方を想像していましたが、物腰の柔らかい実に大学教員らしい方であったのは意外でした。進学や研究に関して相談したあと、学内を案内していただきました。今でも印象に残っているのは、先生の蔵書がある図書室です。卒論の際には手に取ることができなかった書籍がいくつもあり、その充実ぶりには目を見張りました。

晴れて大学院に入学するとハードな院生生活が待ち受けていました。週2回開催されたゼミは、輪読を通じてポピュラー音楽研究と関わるさまざまな理論を幅広く理解するものでした。修士1年時のテキストは *On Record* と *Study in Popular Music*、それに先生が指定した英語の論文

でした。1回のゼミで書籍であれば1章分、論文であれば1本のペースで読むというハードなもので、三井先生から「こんな大学の成績は見たことがありません」と言われた私の学力では、しばらくはついていくのがやっとでした。特に、読むためには人文社会系分野の幅広い知識が求められる *Study in Popular Music* の輪読準備は大変で、エドガー・ポープさんのアドバイスには本当に助けられました。また、*On Record* に一部収録されていたポール・ウィリスの *Profane Culture* は、私の研究の方向性を決定づけたものでした。

博士課程に進学した1997年、金沢市で第9回国際ポピュラー音楽学会が開催されました。国際学会会長であり大会実行委員長でもあった三井先生が出した大会テーマは「Popular Music. Intercultural Interpretations」でした。先生がこれまで主に海外で発表されていた研究内容がストレートに反映されていると思うと同時に、修士時代までの「遠くにある」黒人の音楽文化研究から研究対象を変えようと考え模索していた私にとって「足下を見ろ」とも言われているかのようにハッとさせられたこと、今でも鮮明に記憶しています。それから今日にいたるまで、地元である茨城県を中心としたフィールド調査を継続しています。

退職後の三井先生の仕事には、自分のご経験を学術的に振り返り後世にバトンを渡す意図があったと思います。退官記念論文集の『ポピュラー音楽とアカデミズム』(2005年 音楽之友社)に収録されたご自身が書かれた詳細な研究履歴にはじまり、JASPM2006年大会でのご自身の経験をふまえた洋楽受容に関する発表、演奏履歴も加わった私家版の『執筆総覧+出演総覧』(2012年)、その集大成として『戦後洋楽ポピュラー史 1945-1975』(2018年 NTT出版)が出版されました。これらの仕事は、先生の個人史というだけでなく、そこからアメリカの強い影響下にあった日本の戦後ポピュラー音楽文化史を見渡せるものでした。先生のこれらの仕事は、自分が好きなものそしてさらに自身の経験までも対象化し、学術研究として昇華し、表現されたものであったと思います。それはポピュラー音楽文化とその社会を研究する私の指針となっています。

現在の研究成果を先生にお見せできなかったのは、本当に悔やまれます。どうか、安らかにお休みください。

小さな声の力

小川博司

JASPM 大会 35「三井徹先生追悼シンポジウム」では、以下のようなことをお話しました。

第一に、三井先生が IASPM-Japan (国際ポピュラー音楽学会日本支部)、JASPM (日本ポピュラー音楽学会) 立ち上げから 1997 年の IASPM 金沢大会開催までを、辛抱強くリードされたこと。1989 年に日本ポピュラー音楽学会準備会設立の呼びかけでは、以下の三点が強調されたこと。

- (1) 体系的な取り組み／学際的なアプローチ
- (2) 送り手と受け手の交流
- (3) 国外の研究者、研究団体との交流、IASPM との連携

第二に、先生はポピュラー音楽研究の「権威」であったけれども、「権威主義的パーソナリティー」の持ち主ではなかった。そのことが JASPM の順調な世代交代にとって幸いだったこと。

第三に、(3)は実現しているが、はたして(1)はどうか。1980 年代末から 90 年代半ばまで、集中的にカラオケについての学際的な研究が行われ、*Karaoke around the World* (1997、細川周平さんと共編著)という成果を出した。

第四に、三井先生のベースは民俗学であり、民俗学がオルタナティブな学問として見直されている現在、そのことをもう一度考えてみるべきではないか。

以下では、シンポジウムでお話しできなかった、個人的な思い出を書きます。ひとつは、三井先生はお話されるとき、とても声が小さかったということです。息を吸い込みながらお話しているのではと思うことさえありました。私立大学の語学の授業、国立大学の専門科目の授業では、受講生の数も少なく、あえて大きな声を出す必要がなかったのかもしれませんが。声が小さいと、聴く側は意識的に集中して耳を傾けなければなりません。同時に、三井先生にあたかも吸い込まれていくように、言いたいことを話してしまうことになります。三井先生はこんなふうにして、先生より若い世代の声を吸い上げながら、学会設立、国際学会大会開催を実現させたのかもしれません。

もうひとつ。私は一回だけ先生に褒められたことがあります。三十年くらい前でしょうか。

「小川さんは、飲めないのに、いつも最後までいるんですよ。えらいですよ。」

嬉しかったから、今でも憶えているのです。なかなか含蓄のある言葉だと思います。

三井先生、ありがとうございました。

三井徹先生の思い出

於吹純一 (Jun OBUKI, Ph.D.)

三井徹先生のご逝去を悼みご遺族の皆さまには心よりお悔やみ申し上げます。

先生について少し思い出すことがありますので、ここで紹介させていただこうと思います。以下全て曖昧な記憶で書きますので多少の誤謬はあるかと思えます。悪しからずご寛容のほどお願いいたします。

まずはそもそも私が本会に入らせていただいたのは先生からのご紹介でした。

'94年頃、私はビートルズの *nursery rhyme* の紹介の文を一般誌に書きました。'80年頃から調べていたことでしたが当時は載せられる場もなく、その時にちょうど縁あって載せてくれる誌があり送ったのでした。一応は当時囁矢だったと思っています。

それを機にポピュラー音楽関連の記事として考察を伴った物を書きたいと思い始めました。何かの機に、多分新聞で、三井先生とご活動を知り、お便りを書きました。いただいたお返事が、JASPM の場があること、関西にいるのなら小川博司先生を頼ると良い、との旨でした。その後、小川先生の輪読に数年通わせていただくこととなりました。

もう一つは、2000年丁度ぐらいのことだったと思います。これも曖昧な記憶なのですが、三井先生がビートルズの完コピに否定的な発言をされたと思います。つくくみのレコードへの言だったかもしれません。当時、小川先生から今はマルチメディアの時代との旨の言葉を教わっていて、二つ合わせて三井先生に対して逆の論陣を張ってみようと思いました。

2000年前後の頃、私は関西・関東を行き来する生活をしていました。ちょうどお正月に関東にいる間に JASPM 東京での新年例会があったので、何回か出させていただいていました。その何回かの内に口演の場を貰いました。

規範という側面から考えて論を立てることとし、かつてに比べて現代では規範が拡充されたのみであり想像力の劣化とは無関係との旨を述べました。すなわち、かつて(60年代頃)は規範がレコード・コード譜・歌詞ぐらい

しかなかったのに対して、現代(2000年頃)は各メディアで容易にオーケストラ総譜のように各パートの情報が得られるようになり、すなわち規範が詳細になったのみであること、創造は総譜を演奏する上に為すものであり創造力の劣化とは無関係、のような趣旨を述べました。

当時完コピはビートルズ以外には YMO ぐらいだったと思います。現代ではますます拡大し、プログレ系の多く、レッドツェッペリン、ピンクフロイド、キングクリムゾン、人間椅子などまで(更に他にも多数)、当時以上に活況を呈していると思います。

本論は文章にしていませんのでここに要旨まで書かせていただきました。

個人的な思い出話ですが、先生との縁が皆さんより薄い私の中にも先生のご指導が残っていることを二点述べさせていただきます。

三井先生、安らかに休息ください。

そちこちに三井徹の影がある。

佐藤良明

早くも走馬灯のようになってきてわが人生、ぐるぐる回るそちこちに三井さんの影がある。私淑の始まりは、いつだったか忘れた。『ニューミュージック・マガジン』は大学1年から手にしていたが、毎号見開きページをびっしり埋める「新着洋書紹介」の意義も苦勞も、当時分かっていたはずはない。マイケル・グレイ『ディラン、風を歌う』（晶文社、1973）の訳書を読んでも、こちらの英詩の知識がなければピンとこない。それでも、ディランを理解できる人が日本にいて、そういう人が訳すとちゃんとディランになるのだと知った恵みは大きかった。大学院に入った年に「レコードの対訳を考える」という雑誌企画で、三井さんが、新作『血の轍』から“Buckets of Rain”を選んで、「やっぱりこの訳者は英語はだめなのか」と嘆いておられたのも痛快で、以来私は、ディランの訳を正したいという思い上がった気持ちを70歳まで引きずることになる。

パイリンガルの英語力と、英語圏民衆音楽についての突き抜けた知を携えながら、日本のジャーナリズムと上手にやっていくのはどんな感じだったのか。それを思うと、「新着洋書紹介」の不屈の意志が想像できるのではないか。読者の姿も見えないままに32年（全部で多分378号）、退職後、補遺と索引で裏打ちして、「ポピュラー音楽文献5000冊」という副題をつけ市場に出した。20世紀後半のポピュラー音楽言説史を追うのに、またとない貴重な資料だ。ハーディとラングによる『ロック・エンサイクロペディア』（原著1976、みすず書房、2009）も必携だ。我々はウィキペディアの平べったい情報に頼らず、実感をもたらす知識を読むべきである。

面目ないことに、三井さんとの出会いの場を仕掛けてくれたのは三井さん自身だった。国際ポピュラー音楽学会の金沢大会（1997）にも呼んでくださったのに不義理をした私を、『J-POP 進化論』刊行後、民博の研究会で話してくださいと誘いかけた。出かけてみると、会場には徳丸吉彦氏をはじめ大家がぐると座っておられた。50歳を目前にした私の日本のうたの研究は、そんな冷や汗と共に始まったのである。

金沢大学にお邪魔したときには、夜の街に連れて行かれ、翌朝は研究室に招かれた。書庫の貴重なコレクション—その行方を気遣うだけの人間力が自分になかったのも無念である。一方で、退職記念のシンポジウムを東大でできないかと、大山昌彦さんを通じて依頼をいただき、駒場の真新しいホールで、ピーター・バラカンさんを変えて「ポピュラー音楽へのアプローチ：アカデミズムとジャーナリズムの両面から」というシンポジウムが実現した。翌年、同会場でのJASPM第18回年次大会の開催が決まったとき、三井さんは「グリーン・マーカスを呼びませんか」と言い出して尽力されたようだけれど、実現はならず。でも、あれからもう17年—国境を越えての研究交流は、JASPMでも、まさにこれから盛り上がっていくのだろう。

晩年の三井さんからはありがたいお招きを二度にわたって受けた。ひとつは『戦後洋楽ポピュラー史』（NTT出版、2018）の出版記念トークイベントの対話役。ミュージック・ペンクラブ音楽賞を受賞したこの本は、JASPM駒場大会でのワークショップでのお話が起点となったと聞いている。もうひとつは、*Popular Music in Music: Transformation Inspired by the West*（Bloomsbury, 2020）の背表紙に紹介文^{フラーブ}を書かせてもらったことだ。後者については『ポピュラー音楽研究』Vol. 24から書評の依頼もあった。刊行後、ご本人から「貴兄の拙著評が出ていてびっくり」とのメール。「びっくり」の理由は、過去に三井徹編で出た3冊の英文研究書はどれもJASPM機関誌の書評ページにスルーされてしまったことにあるらしい。

JASPMの支部として始まり、国内向けの活動をしてきたJASPMが三井さんのグローバルな執筆活動をそのまま受け止めるのは無理な面もあるだろうが、これからでも時間をかけて吸収していけばよいのではないか。手始めに『音楽自体に耳を傾ける30編』（国立国会図書館オンライン、2021）を読むのはどうだろう。英語論文を10編も含むので、そもそも出版社に働きかけるのはあきらめたという論考が、電子版の書物としてまとめられている。若き日のバラッド研究も、ロック興隆期の意欲作も、一生涯関心を持ち続けた米・日のルーツミュージック論もある。

と、ここまで書いて、三井徹という人はまだ全然死んではいないことに気づいた。本学会の根っこをなす滋養満点の知の源泉を、これからでもいい、汲み尽くしていきたい。

嗚呼、そういうことだったのか

東谷護(愛知県立芸術大学)

暖かく迎えてくださった研究室訪問

三井徹先生に初めて会ったのは1992年夏だったと思う。当時私は修論のテーマを日本のフォークソングに定めたものの、参考になる本格的な学術書や学術論文がみあたらずモヤモヤしていた。そんななかで、『ポピュラー音楽の研究』(音楽之友社、1990年)に出会った。ここには日本のポピュラー音楽について何一つ書かれていなかったが、本格的な学術論文が収録されており、有り難かった。訳者の三井先生に、研究へのアドバイスやポピュラー音楽研究について教えていただきたいと思い、金沢大学教養部の三井研究室宛てに手紙を送った。今なら電子メールやSNSで簡単に繋がるだろう。当時は手紙を送るところから始まるのが懐かしい。(教養部という響きも!)論文1本さえない若者に時間を割いてくださった。当日は、金沢城内に研究室があったのを知らずに、現在の金沢大学角間キャンパスに行ってしまう、教務課職員に頼み込んで三井先生に連絡をとってもらおうという迷惑この上ない異邦人に、先生自ら新キャンパスに移動していただき、さらには丁寧に私の質問に応じてくださるにとどまらず、ポピュラー音楽研究の現状を教えてくださいました。若輩者にも優しく接して下さる研究者の心みたくないものを強く感じた。

尖っていたころの若き三井徹をしる

私は、1995年後期から1年半ほど、科目等履修生として、三井先生担当の大学院科目「音楽学演習(ポピュラー音楽研究の理論と方法)」等を受講した。先生の御厚意で、図書室(三井先生の蔵書が置いてあった旧研究室)の利用とコピーをとれるようにしてくださった。なんの雑誌だったかを覚えてないのだが、この図書室で本をばらばらとめくっていたときに、紙が何枚か挟んであった。読書メモだろうと思って、三井先生はどうやって読んでいるのだろうと興味津々に目を通して驚いた。そこには、何かの文章への「ここは違います」という文字があった。どうやら編集部宛の手紙の下書きだったようだ。この下書きをめくると手紙が眼前に現れた。「三井さんのような専門家に正していただいて云々」という趣旨のことが書かれて

いた。差出人をみると、中村とうよう氏だった。正確な日付を覚えていないが、彼との共著『フォーク・ソングのすべて』(東亜音楽社、1966年)の前だったことだけはよく覚えている。

このエピソードのほぼ10年後に三井先生の退職記念論集『ポピュラー音楽とアカデミズム』(音楽之友社、2005年)に収録された中村とうよう氏の論考のなかで、私が偶然、目にした三井先生と中村とうよう氏の往復書簡についてのエピソードが披露されており(44頁)、あのときのものが現物だったのかあと一人微笑んだ。

この小文を記すにあたって、あらためて退職記念論集に収録されている三井先生自身が作成された研究年譜と私家版『執筆総覧・出演総覧：三井徹』(2012年)の三井先生が研究をスタートする20代前半をみたところ、来日したピート・シーガーの久留米公演の楽屋に訪ねに行くにとどまらず、自身の小論を手渡し議論までふっかけている。詳細は、三井先生の日記も交えながら紡いだ『戦後洋楽ポピュラー史1945-1975』(NTT出版、2018年)で紹介されている(218-220頁)。ただ、私の知る三井先生には、こうした若き頃の尖った感じはなく、紳士で、学者そのものという感じだったから、不思議でならなかった。

ふとした一言

三井先生の退職記念論集刊行にむけて三井研究室出身の大山昌彦さんを中心に企画が動き出した折りに、三井先生との打ち合わせに小泉恭子さんと私に大山さんから声がかかり金沢に出向いた。打ち合わせ後に食事をご馳走になり別れ際だったかに、「僕はみんなにこういう研究があるんですよと紹介しただけで、学術研究をしていないんだよ。」という趣旨のことを言ったのには3人とも驚いたのをよく覚えている。(実際には英文で論文は発表されていたのに。)退職後に先述した『戦後洋楽ポピュラー史1945-1975』を世に問うなど、精力的に研究成果を発信されていたことをここで指摘するまでもないだろう。若き頃の誰かの書いたものへ向かった尖った心持ちは、研究を続けていくなかで、自分自身へ向かうようになったのだと私は感じている。だからこそ、退職間際に私たちに放った言葉だったのだ。その応えとして、学術書として、方法的にも多くの示唆を与えてくれる『戦後洋楽ポピュラー史1945-1975』を僕らに直球で投げかけてきたのだろう。

二股膏葉の想い出

中河伸俊
(大阪府立大学・関西大学名誉教授)

日本ポピュラー音楽学会は、いまでも多分にそうだが創設期からとても間口が広く、研究者だけでなく評論家やライター、愛好家、音楽関連業種の人なども構成員になっており、そしてその傾向にはおそらく三井さんの人脈によって下支えされている面があった（中村とうよう氏や北中正和氏の入会がその例）。そもそも当初はこの国にポピュラー音楽プロパーの研究者は一握りしかいなかったから、それにはある種の必然性があった。しかしそれだけではなく、三井さんは一方で日本の PM 研究の質を国際レベルに高めていくことに心をくだきつつ、もう一方で、そのような幅広いメンバーシップのあり方を好んでおられた気がする。少なくとも私の場合、そんな方針の学会だと感じたからこそ JASPM に入ったのだった。最初の勤め先が富山だったので、ご近所のよしみで学会の北陸例会に顔を出し、三井さんともお付き合いさせていただくようになったのだが、じつは逸脱と社会問題の社会学が本籍の私にはキャリアを通じて PM 研究と呼べるような論文は2本しかない。一方で、『ザ・ブルース』誌や『(ニュー) ミュージック・マガジン』誌を皮切りに音楽雑誌に寄稿してきた内職ライターなので、三井さんは私にとってはずもって、『マガジン』に毎月『新着洋書紹介』を寄稿する人であり、そして自分の趣味（北米のアフリカンアメリカンのポピュラー音楽）の分野で、本を書いたり関連する翻訳をしたりアルバムの解説を書いたり歌詞カード用に曲の聴き取りをしたりと八面六臂の活躍をしている人なのだった。

そしてそうしたお仕事ぶりが、私の三井さん像に微妙なアンビバレンスを引きこむことにもなった。私の内職ライターとしての歩みの出発点はシカゴのブルーズクラブでの日暮泰文さんとの出会いなのだが、日本にブルースという音楽ジャンルを定着させたキイパーソンとっていいその彼が（その足跡は日暮・高地編の『ニッポン人のブルース受容史』2023 に詳しい）、三井さんの黒人音楽関係のアウトプットにきわめて批判的だった。その批判はほとんど憤りに近く、それに駆られて、二人と一緒に仕事をしたロバート・ジョンソンの『The Complete Recordings』

の日本盤のブックレットでの三井さん担当の訳詞の「誤りを正す」ために、訳し直した全歌詞を収録した CD ブックを刊行しませんでした（『ロバート・ジョンソンを読む』2011）。黒音楽愛好家の私には、日暮さんの言い分はよく分かる。専門のブルークラスや英国のバラッドの研究に比べれば、三井さんのその他の分野での「商業的」なお仕事はときに精度と背景知識においてかなり見劣りがする。とはいえ、二股膏葉の私としては、日暮さんに対してはこう言いたい。三井さんはこの国でポピュラー音楽研究という分野がひとり立ちできるようにするのにとても大きな貢献をした人だし、それに、あなたはたしかにぼくらに何人もの伝説のブルーズマンを生で見せてくれたけど、三井さんはあの（あなたもその著書を訳した）ポール・オリヴァーをぼくらに生で見せてくれたんだよ（@1997年7月の金沢での IASPM 大会！）。

今月（23年12月）発行の音楽誌掲載の対訳記事のために、ビッグ・ビル・ブルーンジーの戦前録音、「Too Many Drivers」を聴き取りしなければいけなくなって、これが久々の難物だった。編集者に泣きを入れたら、資料として昔出た日本盤 CD の歌詞カードをスキャンしたファイルを送ってくれた。クレジットを見ると、「Lyrics transcribed by Philo Biblon Co. and revised by TORU MITSUI」となっている。うわあ、さすがは超絶の英語力を誇る三井さん。音楽出版社から提供された歌詞を、録音に当たって耳で修正してるんだ。私には取れなかったここもあそこも、しっかり埋まっているぞ、脱帽！ ところがですね。送ってもらった歌詞を見ながら繰り返し音を聴き直すと、三井さんが埋めた箇所はブルーンジーが歌っているのとかなり違う。ていうか、なまじ英語ができるから頭の中で作ってしまっているところがあるように見える。よし、同じ聴き取り業の後輩としての「恩返し」だ、がんばるぞ。というわけで粘り強く再生を繰り返し、脂汗をかくて、たぶん現時点では世界一正確なこの歌のトランスクリプションを仕上げた。こういうのは学恩とは言わないのかもしれないけど、先人の業は励みになる。あの三井さんの柔和な笑みが無性に懐かしい。

三井徹先生を偲んで

葉口英子
ノートルダム清心女子大学

三井先生のもとで学んだ金沢大学での院生時代、毎日のように拝見していた元気なお姿と研究に専念されていたご様子が鮮明に記憶に残っており、それは長い月日を経てもいつまでも変わらないものと安心していた。大きな支えであった三井先生の存在を折に触れ思い出し、突然のお別れとなったことに今も悲しみと寂しさがこみ上げる。

三井先生には1993年にはじめてお目にかかった。河端茂氏の書いたレコード業界に関する雑誌記事の中で、「1993年4月から金沢大学の大学院ではじめて音楽学のなかにポピュラー音楽が包含されたこと」「専任教員は三井徹教授で音楽産業の学際的研究を一つの柱とすることが紹介されていた。興味をもった私は三井先生に手紙を送った。しばらくして先生から電話があり、就活中で大学院進学など考えもしていなかった私にその道が開かれた。

そこで、はじめて三井先生の著書・訳書『ポピュラー音楽の研究』、『黒人ブルースの現代』『「反逆から様式へ。」イギリス・ポップ芸術論』を読んだ。学術的な対象としてポピュラー音楽を扱う研究領域があることに驚いたとともに、その第一線で活躍する研究者になんと安易に手紙を送ってしまったのだろう、と後悔した。その後、先生からのお誘いで大阪大学での集中講義に2日間参加した。直接お会いできたことに加え、黒人ブルースの歴史をトピックとした講義が新鮮かつ刺激の内容だったため、感銘を受けたことを覚えている。

1994年から1997年までの金沢大学修士課程の在籍中はさまざまな経験をさせていただいた。現在、金沢大学附属図書館収蔵の「三井コレクション」と称されるポピュラー音楽に関する膨大な数の文献は、当時院生室の隣にあった図書室でいつでも手にすることができた。JASPMの研究例会や全国大会にも参加し、院生の身分でありながら多くの研究者の方々と交流させていただく機会にも恵まれた。修士2年目、リヴァプールへの交換留学を決めたときも先生は後押ししてくださった。三井先生の恩恵にあずかりながら、気の合う同期の院生仲間に囲まれ、当時のポピュラー音楽研究の先端を学ばせていただいた。こ

の金沢で過ごした濃密な3年間は私にとってかけがえのないものだ。

コロナ禍で原稿を執筆中、Claudia Gorbman の *Unheard Melodies* を金沢大学から取り寄せた。かつて修士論文で音楽と映像の相互作用をテーマとしたとき、三井先生から薦めていただいた1冊だ。届いた本は25年を経ても当時の空気を纏っていた。懐かしかったこともありそれを三井先生にお伝えしたところ、「Claudia Gorbmanの本は確かに良い本ですね」との一言と『新着洋書紹介：ポピュラー音楽文献5000冊』で取りあげた本は金沢大学図書館にあることを教えてくださった。悲報が届く1ヶ月ほど前、アメリカ民俗学会機関誌 *Journal of American Folklore* に発表された原稿が先生から送られてきた。それが最後のやりとりとなった。残念なことにいつも以上に泣き言としか捉えられない内容の返信しかできなかったが、金沢時代の感謝を改めてお伝えしていたことがわずかな救いだ。

2022年にいただいた資料は、“音楽テキスト自体に目配りするように”というメッセージが強く込められたものであった。院生時代レポートや論文をご指導いただく中で、「で、肝心の音楽についての分析は？」とよく問われたことを思い出す。この三井先生からの問いは、今後の自身の研究を通じ研鑽を重ね引き継いでいきたい。最後に、不出来な教え子である私に研究に携わるチャンスを与えてくださったこと、長きにわたってあたたかく見守ってくださったこと、三井先生への感謝の言葉は尽くせない。日本のみならず世界のポピュラー音楽研究の発展に向けられた三井先生のご尽力と偉大なご功績に敬意を表すとともに、心から哀悼の意を捧げたい。

無題

エドガー・W・ポープ
愛知県立大学

恩師であり友人でもあった三井先生への感謝の気持ちは無限である。

30年以上前、私はシアトルで民族音楽学の大学院生だったときのある日、名前しか知らなかった三井徹先生からの手紙をいただいた。私が地域の研究例会で戦前の日本ジャズについての論文を発表したとの報告を学会のニューズレターで見たので、その論文を送ってほしいという依頼であった。その手紙からやり取りが始まり、そのおかげで私は1995年に金沢に行き、三年間三井先生の指導で研究するという幸運なことになった。

彼の授業でミドルトンやフリスの著書を精読し、それについてディスカッションをすることでポピュラー音楽研究のアプローチや考え方への理解を深めた。三井先生の教育と文章で伝わった詳細への注意と歴史への関心に強いインスピレーションを受けた。私にとって何よりも感動的だったのは、三井先生の長年にわたる読書と書評の執筆で蓄積した幅広い知識だった。「Encyclopedic knowledge」（百科事典的な知識）という表現が彼にピッタリ当てはまると思った。例えばあまり知られていない研究者の名前を彼にいうと、ほとんどの場合彼はその人の基本的な研究内容をすでに知っていた。5000件を超える書評は現在と将来の研究者にとって重要な文献として残るものだが、彼にとってその執筆は永遠に続く自己教育の一環でもあったと言える。普段は三井先生への突如な相談などは歓迎されたが、書評を書いている日だけは邪魔してはいけないと我々大学院生たちは分かっていた。

三井先生がアメリカのダートマス大学で半年の授業を行っている間、彼の巨大な書籍コレクションを別の部屋に移動させる作業の担当者に私が任命された。できる限り頑張ったが、彼は帰国したら私にお礼を言いながら本の順番にいくつかの間違があると丁寧に指摘した。そのような秩序への関心と詳細への注意は彼のすべての活動の特徴であり、広い知識と止まらないエネルギーと合わせて彼のポピュラー音楽研究への多大な影響の基盤になったと思う。

一方彼のことを今考えると、何よりも思い出すのは彼の笑い方、そしてアングロアメリカン民謡「The Lass of Roch Royal」を歌う彼の歌声である。

耳を傾ける三井さん

細川周平
(京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター所長)

三井さんと初めて顔を合わせたのは1985年ごろ、金沢城の門で待ち合せたと記憶している。それに先立ち私は国際ポピュラー音楽学会 (IASPM) に1983年 (レゾ) と1985年 (モントリオール) に参加し、海外特派員の意識を持ち、日本に会員網を広げる意欲を持っていた。当時英語で発表していたポピュラー音楽研究者は彼一人しか知らず、声をかけるのは当然だった。自宅に招かれ夕食をいただき、食後に書齋にてギター片手のブルースなりロックなりの講義を聞いたはずだが、何も覚えていない。

それから10年少しが三井さんとIASPMの関係が最も濃かった時期だったと思う。1989年のパリ大会で初参加しコネクションを作り、95年のダートマス大会で会長に選出され、97年の金沢大会を主催し分厚い報告書を完成させた。きっちり学会員らしい足取りを歩み、華麗なフィニッシュを決めた。そんな一冊だった。その頃カラオケが日本産の世界音楽商品として注目され、金沢ではそのセッションが持たれ海外参加者をカラオケに連れていった。カラオケを大学教授が歌う、研究するというのが新聞で面白がられた。ポピュラー音楽についての通念はそんなものだった。*Karaoke around the World* を二人で編集した。三井さんが馴れた調子で国内外の寄稿者・編集者に指示激励するのを若造は眺めていた。その後も金沢やJASPM大会で会ったが、浦和に引っ越してからは彼の参加もまばらになり、一種ご隠居さんになっていたと思う。

去年 (2022年) 春、「音楽自体に耳を傾ける 30編 1963年～2014年発表」と題するCD-Rが贈られてきた。盤面には大仏が耳を傾ける有名なニッチクのレーベル・デザインがNipponophoneの文字とともにあしらわれ、SP盤に似せている。「まえがき」によると、「音楽について綴ってきた文章群の中から、音楽自体に比較的重点を置いたものをひとつに纏めました」。

膨大な著作群から30編を選びすぐったプロジェクトで、第1章は修士時代のレポート「“Willie’s Lady”の旋律と連構造 18世紀スコットランドの伝承バラッド写本譜」、最終章は昭和のいわゆるピョコンコ節を分析した「Songs in

triple time sung in duple time」を配している。途中、お得意のB・B・キング、プレスリー、ビートルズ、新しいところでノーラ・ジョーンズに立ち寄る。「まえがき」はこう続いている。「音楽について膨大な言葉が費やされるなか、もちろん音楽分析論考も少なからず発表されてきていますが、音楽自体の読解はさらに重視されるべきという思いは変わりません」。付録として1978年から2018年出版までの特選研究書10冊が紹介され、「音楽自体に耳を傾ける」の意味がぐっと鮮明になる。「新着洋書紹介」の番外編で、晩年まで専門書を追い続けていたことに頭が下がる。社会学、文化論の立場から新しい流行や批評を追ってきたが、60年間を通して心底共鳴したのは、和音やフレーズやリズムやヴォーカルの綾を読み解く演奏本位のアプローチだった。心から楽しんだのは大学生以来ブルーグラスやフォークで、CD-Rの発行元は伝承歌謡の会を名乗る。浦和の住まいを本部に置く研究会という遊びである。「まえがき」の最後に「自分の書いたものはこの程度のもではありません」と謙遜しているのが、当人の口調を思い出させる。今思えば遺作を意識していたに違いない。

このCD-Rは10年前に配られた青表紙の私家本「執筆総覧+出演総覧」の付録にあたるだろう。このうち出演総覧は高校の合唱祭出演に始まり、大学時代は60年代九州フォークの現場を記録している。私たちが知る学会や講義は活動のほんのわずかで、ラジオ、トーク、ライブ演奏、市民講座など別の文脈でも活発だった。当日の日記が舞台裏、本音をメモしている。それを読むのは楽しくもあり悲しくもある。執筆総覧のほうは大学の研究会発表文に始まり、同じく綿密膨大で、ごく小さな文章まで記録されているのに驚く。整理の人の本領が発揮されている。

こうしてJASPM創立時のメンバーが亡くなると、小さな学会でも世代は変わる感を強くする。だが音源がデジタルに移行しても「音楽自体」は健在だろうし、耳を傾けることが感性知性どちらにとっても意味深いことに変わりない。三井さんはいろいろなかたちでそのメッセージを発していただろうが、私は小リクツ寄りて音楽自体をあまり語り合わなかったのを残念に思う。ニッチクの大仏さんに三井さんを重ねながら自選の30編を読んで、遅ればせながら距離を縮めたい。

私と三井徹先生

三井徳明

私と三井徹先生（以下先生と略す）の出会いには1972年1月3日私が入り出すレコード店で「あなたと趣味を共有する人がいますよ」と言われ電話番号を教えていただき先生のところに電話しました。それから2週間後に先生が我が家を訪れました。その後先生とのお付き合いが始まり51年間の長い付き合いとなりました。同年3月には先生と湯川れい子さんと共同翻訳された「プレイパワー」の仕上げの時まだ一ポピュラー音楽ファンに過ぎなかった私と友人を湯川れい子さんとの対面をさせてくださいました。その後も先生とお付き合いはより広がり同年6月先生のご配慮により湯川れい子さんと再会もできました。そしてアメリカ思考である私に“47th Country Music Convention” ツアーがあることを先生から紹介され同年。私の夢でもあったアメリカ旅行が実現しました。ツアー目的はナッシュヴィルで開催される“Country Music Hall of Fame”の47回年次大会でした。同地滞在中の4日間で多くのカントリー歌手のコンサート、そして有名歌手のサインも頂きました。現在のように海外旅行がまだ十分にできない時代に私にとって忘れることのできない10日間先生と行動した思い出でした。旅行中は先生とホテルの部屋を共にし先生からアメリカ人の暮らし方、アメリカ人の考え方、ポピュラー音楽研究へのファースト・ステップをお教えいただきました。現在の私の基礎は先生のお言葉から始まりました。

その後も先生から多くの情報と知識、書くためのアドバイスをいただき1988年国際ポピュラー音楽学会（IASPM）日本支部の設立を紹介され入会しました、そして翌年日本ポピュラー音楽学会（JASPM〔J〕）設立にも参加し多くの友人を持ちました。そしてポピュラー音楽研究は楽しく面白いことも知りました。その結果本学会大会3回発表、また臨床音楽療法士の人たちにポピュラー音楽を正しく知ってもらうために日本音楽療法学会にも参加し全国大会で7回、WCMT世界音楽療法大会での二つをJASPMメンバーの視点で発表しました。ここにも先生からお受けした知識とJASPM会員からの知識伝授によってできたことを付け加えます。

研究者としての教育を全く受けていなく基礎的知識がないにも関わらずポピュラー音楽研究を楽しめるようになった現在は三井徹先生との長いお付き合いから生まれたと言えましょう。また私の音楽コレクションより先生が求める音源提供などでもできるように成長させてくださいました

先生は私にとって永遠の師であり永遠の友でした。先生の訃報は私にとって大きな衝撃でした。

先生とは去る1月20日の午後、電話でお話しミュージック理論など新たな教えもいただきました。

2月20日、私のFacebookのフレンドより先生の訃報を知らされ慌ててFacebookに書き込みをしました。

私にとって三井徹先生は永遠の師であり遠いところから私達を見つめられていると思います。私のように高齢になった者は若い研究者の知識伝導に努めるとともに良き研究のアドバイザーになること、それが先生への感謝のしるしではないでしょうか？

三井徳明は三井徹先生の訃報を知り先生がお好きだった金沢のお酒とお菓子を残されたご家族に弔意のしるしとしてお送りしました。これが残された奥様、ご家族へのお慰めとなれば幸いです。

◆information◆

事務局より

1. 登録情報に変更が生じた場合について

所属・住所・メールアドレスなどの登録情報に変更が生じた場合、できるだけ早く SMOOSY (会員マイページ) にログインし、ご自身で修正作業を行ってください。変更がない場合、学会誌や郵便物、メールニュース、例会のお知らせがお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。修正項目の入力の際には、入力内容にお間違えがないようご注意ください。

2. 退会の届け出について

本会の退会を希望される場合、速やかに学会事務局 (jimu@jaspm.jp) までお知らせください。

3. 会費請求と学会誌について

2023 年 5 月に、2023 年度の会費請求書類を、学会誌 Vol.26 (2022)と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。

学会誌 Vol.26 (2022)は 2022 年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします (会費納入後、学会誌を送付いたします)。

また、滞納分の会費納入をしたにも関わらず、学会誌が届いていない場合には、入れ違いや何らかの手違いが発生している可能性がございますので、お手数ですが事務局までご一報ください。

4. ニュースレターについて

従来ニュースレターの諸連絡用に設定されていたメールアドレス nl(*)jaspm.jp を 2023 年末で廃止しました。今後、ニュースレターに関するお問い合わせは研究活動委員会のメールアドレス jaspmkk(*)gmail.com にお寄せください。nl(*)jaspm.jp に送られても対応することができませんので、ご了承ください。

本紙のバックナンバーについては JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています (URL : https://www.jaspm.jp/?page_id=213)。

JASPM NEWSLETTER 第 135 号

(vol.35 no.4)

2023 年 12 月 31 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 増田聡

理事 安田昌弘・周東美材・小泉恭子・
永富真梨・大和田俊之・南田勝也・
永井純一・溝尻真也

学会事務局：

〒606-0016

京都府京都市左京区岩倉木野町 137

京都精華大学メディア表現学部

安田昌弘研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

jaspmkk@gmail.com (ニュースレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：南田勝也・永井純一